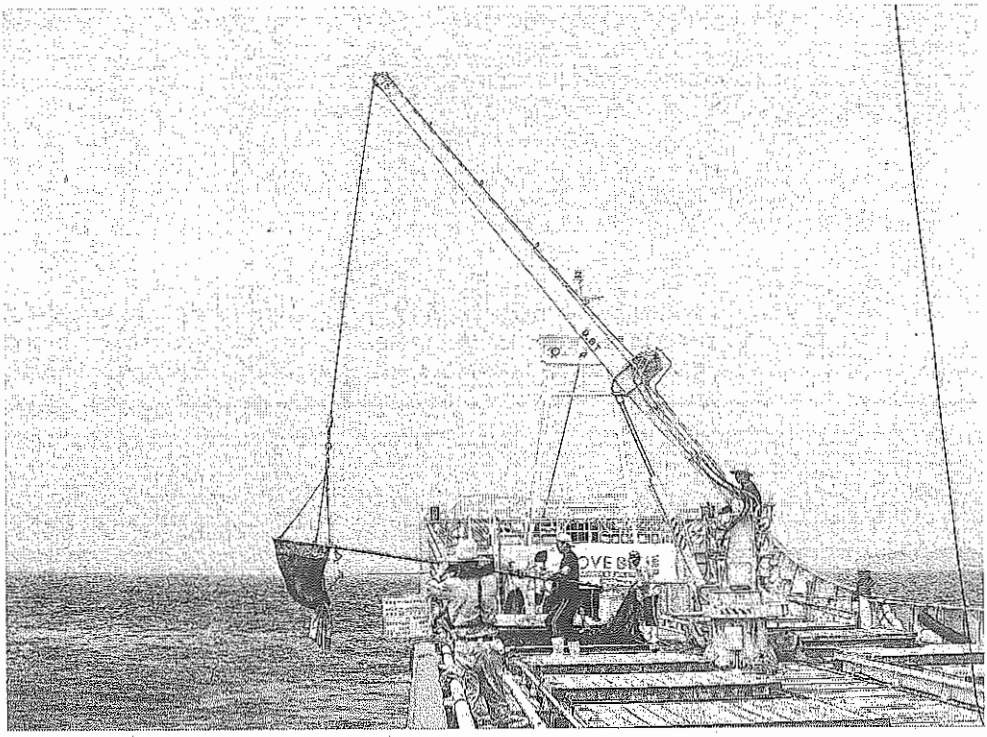
東京湾口にマダイ種苗20万尾



クレーンを使用し金沢沖、久里浜沖、松輪沖の3ヵ所に放流

つり環境ビジョン放流事業

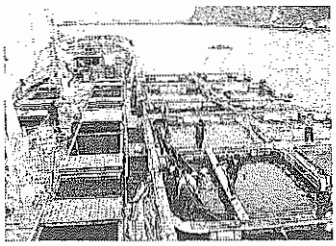
（一社）日本釣用品工業会と（公財）日本釣振興会の協働プロジェクト〝つり環境ビジョン〟の平成二十七年度放流事業が八月八日（土）に行われ、マダイ種苗二十万尾が東京湾口の三ヵ所に放流された。

（公財）神奈川県栽培漁業協会に事業委託しているマダイの放流事業は今年度で三年目となる。春先にマダイ受精卵を静岡県温水利用研究センターから仕入れ、同協会・魚類飼育棟内の円形水槽五基にて、孵化および飼育を続け、約20㎜まで成長した稚魚を六月に入って三浦半島・小網代湾に設置されている中間育成施設へ移設。その後、約二ヵ月間で稚魚は平均全長66・73㎜、平均重量6・03gまで成長し放流当日を迎えた。

この日は、つり環境ビジョン事務局スタッフ立ち会いのもと、夜明け前から同協会職員らによる作業が開始され、中間育成施設から稚魚を活魚運搬船のイケスに移し放流地点へと向かった。

船がポイントに到着すると、網ですくったマダイ種苗をクレーンによって海面まで運び、魚体が傷まないよう細心の注意を払いながら放流作業を行った。

放流尾数の内訳は、金沢沖五万尾、久里浜沖十万尾、松輪沖五万尾。二～三年で成魚に成長し、釣り上げられたり漁獲されたマダイは、人口育成特有の「鼻孔隔壁欠損」を確認することで、放流の成果が評価できる。



種苗の移設作業